
さよなら、ペイペー

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、ベイビー

【Zコード】

N7073V

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

極悪非道の荒川課長に今日も容赦なくダメだしを食いついた岡崎美穂子の防衛術はメイクだった。どう俺様課長と頑張る女の子のお話。中編の予定。活動1周年記念リクエスト作品です。

武装

面倒くさいって、女同士で集まつたりしたら、たまに言い合つたりする。

女って確かに面倒くさいよね。グラム単位で体重の増減気にして、お通じ悪ければすぐにお肌にでちゃつて、毎晩お風呂に入るたびに時間をかけて、それこそ爪の先から頭のてっぺんまで磨いて手入れして整えて。

だけど男の人から見ればそれが楽しそうに見えたりするみたい。楽しいとか思つてないとやつてられないよ。女って大変なの。ちょっと手を抜けばすぐに「女捨ててるんじゃない?」なんて言われちゃうし。

だから今日も私は気合を入れて準備をする。

洗顔したらローションパックして、はがしたらもう化粧水をこれでもかつてくらい追加してパッティング。潤えー、潤えーって念じながら美容液つけて、日中用のUVカット成分入りの乳液でフタをする。これで第一段階終了。

ここからやつとメイク突入。

下地にコンシーラー、ファンデはお肌の調子によつてリキッドとクリームとパウダー使い分け。今朝はちょっとファンデのノリがあんまり良くない気がするから伸びのいいリキッドチョイス。今日はシヤドウ何色にしようかな。いいや、無難にあんまり派手にならないブラウンゴールドにしよう。一重の私の目は何にも塗つてなければ本当に寂しい。自分の顔で一番嫌いなところ。

だから念入りにシャドウを塗る。アイラインはジエルとリキッドの一滴使いでぐりぐり粘膜を埋めたら目の周りをぐるっと囲んで。それでようやく普通位の大きさになるように思つ。

仕上げにつけまつげをつけて、目前のまつげと一緒にビューラーで挟んでマスカラを塗る。ようやくこれでいつもの私の顔。仕上げに眉毛描いて、ハイライトとノーズシャドウにチークでおしまい。

お気に入りのジルスチュアートの手鏡の中にはこれでもかつてくらいの盛りメイクの女がいる。

ぱつさばさのまつげ、気持ち悪いなんて言われていることは、知っている。派手なギャルみたいなメイクだと言われていると、わかっている。

だけれど止められない。

これは私にとつて武装なのだ。

だつて、たっぷりメイクしていたら、泣こうと思つたつて泣けないじゃない。

黒い涙流したくなんかないもの。泣いたらつけまつげだつてそれちやうし。

だから、私はメイクしなくちゃいけない。

泣きたくなるくらいしんどい毎日をやり過ごすために、私はメイクをする。

出かけたくないくらい気分が落ち込んでいる時こそ、メイクをする。せつかくメイクしたなら誰かに見せたい。ただ塗つて落とすだけなんて悲しいから。

昨日はネイルも新しくした。仕事の邪魔になるから短めだけピンクベージュのフレンチにラインストーン。綺麗な指はテンションを上げてくれるよね。コテで巻いた髪もぱっちり、決まっている。

うん、大丈夫。今日も頑張れる。

「却下」

書類が机に大きな音を立てて投げ出される。2日がかりで作った企画書、全否定。それでも勇気を振り絞って、直訴する。

「やり直しをさせてください」

「いらっしゃい」

「……わかりました」

投げ出された書類を抱えて、頭を下げた。周囲から同情のよくな、憐みのような視線を感じる。

悲しいことに、これはいつものことだった。

せめて具体的にどこがいいとか悪いとか、言ってくれればいいのに。イエス・バットはビジネス会話じゃ重要じやないのか。

なんて言えないのは極悪非道と評判の荒川課長相手だからだ。

荒川課長はむかつくぐらい仕事ができる。何しろ日本の最高学府出身で留学経験まである。さらに顔もよし、背も高い、出世頭、となれば女の子はほつとかないはずなのに、会社の女の子はみんな避けて通る。

既に綺麗どころが散々返り討ちにあつていろいろのもあるけれど、一番大きいのは優秀すぎるから。

課長は自分があつたりと出来ちゃう分、出来ない人に容赦が無い。そして出来ない人の気持ちをわかつてくれない。

確かに仕事じゃ経過なんて結果の前じゃ全く意味が無いつてことは当たり前だけれど。努力のどの字も認めてくれない相手じゃ、恋愛したいなんて思わないでしょ。

スバルタすぎる荒川課長のおかげで、ウチの課の業績は上がっている。……だけどその分課内のストレスもつなぎ登りだ。

一人目は黙つて次の日から来なくなつた。一人目は他の支店に転属願いを出していなくなつた。多分三人目が、私だと、思われている。

荒川課長が上司になる前は、優秀ではないけれど普通くらいに仕事ができると思っていた。それがどうだろう。やることなすこと全てにダメだし。入社以来コツコツと積み重ねてきたつもりの経験や自信は、あつという間に粉々。

この企画書だつて、すっごく頑張つて作つたんだけどな。頑張りだけじゃどうにもならないつて、理解しているけどさ。

「おこ岡崎

席に着いつとした私の背中を極悪非道の声が追いかけてきた。

「お前もつ企画とか作らなくていいから。茶入れてこ」

メイクがつづりしてきてよかつたと思つのは、こんな時。

「……はい」

ぱんぱんに膨らんだメイクポーチを持つて、給湯室へ向かつ。メイク、直さなくちや、終業まで、頑張らなきゃ。

慣れ

悔しい。

さつき提出した企画書全否定ももちろん悔しい。

だけど何が一番悔しいかって、私を全否定されたのが、悔しい。
あの極悪非道は仕事に直接関わること以外に言葉が全然足らない。
だからウチの課の人たちは省略された言葉の意味を察する能力を身
につけてしまった。というか、身に付けざるを得なかつた。
だから、わかる。

お前もう企画とか作らなくていいから。

あれはもう一度と企画書を作るなつてことだ。
しかも私がさつき提出したものを訂正なりしてまた持つていいくつて
わかつていて、言つてるんだ。

給湯室に駆けこんでポーチを漁る。二つ折りの携帯鏡、綿棒、ティ
ッシュ、目薬、ウェット面付きの脂取りシート、ルースパウダーを
流しの横カウンターにぶちまけた。

「…………うひ

上を向いて嗚咽は呑み込む。目頭は綿棒とティッシュでガード。そ
んで深呼吸すれば、涙はこぼれない。

極悪非道が直属の上司になつて、2年。本当は慣れたくなんてない
けれど、すっかり我慢することに慣れてしまった。

「はあ……」

最後に大きく息を吐き出して、ビクンビクンながらこの感情をやり過ごす。

何度か瞬きをしてから、クール系の目薬を注す。そしてやつと綿棒とティッシュのガードを外すことができる。

涙でぬれた瞼や目の端の色がティッシュに吸い込まれたら、見たまんまの色じゃなくて水溜りの油膜みたいな不思議な色になつていて知つてしまつたのは、いつだっけ？

黒という色の成り立ちは全ての色を同じ分量だけ混ぜたものつて昔何かで見聞きしたことがあつたような。だから、涙に溶けたアイライナーやシャドウは、まるで七色みたいに見えるのかもしれない。

手鏡の中には、ほんの少しだけ目を赤くした私がいる。よしよし、マイク直せば、OKだよね？

綿棒で滲んだところを修正してラインを引き直して、脂取り紙で鼻や目の下を抑えた後にルースパウダーをはたけば、ほら、元通り、朝の私がまたこっちを見ている。

我慢することに慣れてから、マイク直しのスピードも速くなつたなとぼんやり思う。そんなスキルがアップしてもしょうがないのに。ぶちまけたマイク道具をポーチに押し込んで、お茶を入れたら。

さあ、また戦場へと戻ろう。

「遅かつたな」

「申し訳ございません」

湯呑みを机に置けばまた、極悪非道と向き合わなきやいけない。

何かの仕事から外れりつてことは、それとは別の仕事しろつてことなんだよね。簡単に人の仕事を全否定するくせに、仕事していな状態をものすごく怒るんだ。理解するまで課内全員が怒鳴られたつ

け。

「今日中にやつておけ」

「……わかりました」

何も渡さずに期限だけ言つてこさせ、もう指示内容を社内メールで送つてあるということだ。本当に極悪非道は言葉が足りない。社内メールの内容を確認すれば、数値がずらすらと並んだだけの雑多な報告書をまとめた資料を作れといつものだつた。

今日中つてことは、恐らく週明けの会議で使うんだろう。ちひりと時計を見れば、11時になるといひ。

半田じや到底間に合ひそうもないから、残業は確定だつた。

「じゃあお先します、お疲れさまでした」

「お疲れさまでした」

ひとり、またひとり、と同僚は帰つていぐ。金曜日の夜だ、なるべく早く帰りたいのが人情つてもんだよね。

極悪非道のおかげでうちの課は社内では残業多めの部類なんだけれど、本日に限つては、私ひとりだけが残業のようだつた。別にいいけど、予定ないし。

今夜帰る途中でレンタルショッピングに寄ろつ。笑えるDVDを見ながらスナック菓子とナツツたつぱりのチョコレートをコーラと一緒に食べてやる。油っぽいものを食べると胃もたれするし太るから、普段は食べないようにしている禁断のフルコースだけじやつちやうんだ。

これが終わつたら思いつきにこつもは控えていた全部しちゃう

んだ。

だから我慢、我慢。

これでお給料もらっているんだから、頑張らないと。

「ひつでえ顔^{ヅラ}」

なのに、思わず手を止めてしまつよつた言葉が横から投げつけられる。

……極悪非道のヤツ、まだ帰つてなかつたのか。

「……すいません」

不細工はどうしようもないし、もう夜遅いんだからある程度の化粧崩れは仕方ないだろうが！

だけどヤツとは視線を合わせないまま一応謝る。

あんたにそんなこと言われる筋合いなんてない！ って言えたらな。言えるわけないけど。

「お前ホントムカつくな

一応とはいえたのに、極悪非道は隣の席の椅子にわざわざ座るとキャスターを転がして近づいてくる。

「人と話すときはちゃんと目を見つけて小学校で習わなかつたのか？」

なんでこの人つて空氣読めないんだろう。周囲には散々それを要求しているといふのに。

そつちを向かないのは自信満々で、人を見下すような目していくつてわかつてゐるからだ。誰だつてそんなの見たくない。

頼むから、絡まないでよ。今日は、そりつとかわせる余裕、無い。

「 イハち向け」

それでも唇を噛んで、視線を逸らし続けていたら、急に顎を掴まれて引き寄せられた。

すこく近く、まるでこれからキスをするみたいな距離に、極悪非道荒川課長の顔。

ちくしょう、やつぱりかっこいい。男のくせに鼻の頭にもその脇にも毛穴が見当たらないのが腹立たしい。こちとらコンシーラーにファンデでがっちり固めてやつと消せてるようなもんなのに…。今何か話したら、心の中の罵詈雑言が溢れそうな気がして、私はぐつと口を引きしめた。

不明

お互いの瞳にお互いの顔が鏡のように映つていると、
机付くべりこの間に、課長は私から手を離さなかつた。

私も抗おうとはしなかつた。何かをしたら心の内の激情がありとあらゆるところから漏れてしまふかも知れないと思つたから。
だから傍から見れば、恋人同士が甘く語りつ正在するように見えたかもしれない。

ふとそんなことが頭を過つてよつやく、私は我に返つた。

「放して、下せー」

そのたつた一言だけで最初の強引さとは全く逆、まるつきつ興味を失つたかのように課長は私の言葉通り手を離した。
だけどこちらをじつと見つめる」とは、止めなかつた。
一体なんなんだ。

課長が何を考えているか全く見当もつかなくて、胸に渦巻いている怒りに苛立ちまでもプラスされる。

「おい、帰るぞ」

はあ？ 何言つてんの？

「……私は仕事終わつてないですから、課長お先にどうぞ」

言つなり私は課長へ向いていた顔を身体」と元に戻した。やりたくない仕事にやりたくもない残業。さつさと終わらせて帰つたら、思いつきり好きなことするんだからー。

終わつてないのは課長あんたがたんまり寄こした仕事なんだよ！ つて言

つてやれたら、本当にどれだけ心が晴れるだろう。

そのまま課長の方は見ずに仕事を再開する。

元データを整理して並べ替え、見やすくなるように一部はグラフ化する。量は多いけれども「よく単純な誰にでもできる仕事。それが似合いの、私。それくらいしかできないのが、私。」

そう示したのは、横にいる極悪非道だ。

「これ以降の残業は認めねえからやつと終了しろ」

「……今日中とおっしゃったのは課長でしたが」

「はあ？」

極悪非道は同じことを二度言つことを嫌がる。朝令暮改はろくでもない上司のやることだつて知らないのか。

自分でも己が部下に好かれていなつてことはわかっているのどうか。極悪非道だつたらわかつていなつ氣がする。何しろこちらの気持ちなど、全然考慮してくれないのでから。

仕方なく出来たところまで保存して、パソコンの電源を切る。ため息はこらえられなかつたけれど。

課長の方は全く見ずに帰る支度を整え、私物入れにしている引き出しから鞄を引っ掴んで「お疲れさまでした」と去ろうとしたが。

「よし」

「ちょっと、なんですか！？」

課長は私の腕を掴んでぐいぐいと歩き始めた。大柄な男性の歩幅にはついていけなくて、足が絡まり、しまいには小走りになる。

そのままの勢いでエレベーターに乗せられて、それでも腕は解放さ

れない。

「あの、放してください」

「うるせえ。黙つて言ひないと聞いとけ」

一体何だつていうんだ。極悪非道の考えている」とはいつもわからぬけれど、今はそれに輪をかけてわからない。そりや企画書の出来は悪かつたかもしだれ。だけど代わりに与えた仕事を中途半端にさせてどうするつもりなんだろう。

以前残業を控えるように通達があつた時、虚偽の退勤をした後サービス残業をしていた人がいて問題になつたことがあつた。その人は上司から押し付けられて自分の能力以上の仕事を抱えていたから周囲は同情的だつたけれど、労働基準監督署からの監査だかが入つて、総務にいる同期がかなりやつかいことになつたとぼやいていたのは覚えている。それから残業の申請が確かに面倒になつたもの。私が同じことをしそうだとでも、思つたのかな。……切羽詰まつたらやるかもしれないけど。

「あの、別に仕事途中だつたからって、戻つたりはしませんから」

極悪非道は「お前何言つてんの?」とばかりに田線だけをこぢらに向けた。どうやら違つたらしい。

何か気に障る事でもしただろうか。一応極悪非道とはいえど理由も無く怒鳴つたりはしないってことは、わかっている。だから何かあるはず。でも今日は企画書全否定された後指示通りずつと資料作成していたから、付け入る隙は無かつたと思つけどな。

エレベーターが1階に着いても課長は私の腕を放してくれなかつた。扉が開くと同時に靴音をわざと立てているのかつてくらい響かせて

エントランスを縦断していく。私はばたばたと無様な格好で引きつられるように付いていくことしかできない。

そのまま玄関を出て、ずんずんと大きい通りに向かつて歩いていく。それ違う人がちらちらとこちらを見ているのがわかる。どう見たつておかしいよね。

「あの、課長」

いい加減にしてくれ、と言おうとしたその時、突然目の前にタクシーが止まつた。乗れとばかりに後部座席のドアが開く。

「行くぞ」

「えつちゅつ行くつて、ビーハーー？」

「俺の家」

「はあー！？」

そんなアホみたいなやりとりしてくるつひー、私はタクシーに押し込められていた。降りたくとも乗降側になしつかり課長が陣取つている。

さすがに一体どうこうつもりかを聞い詰めようと息を吸いこんだら、吐き出すタイミングで運転手さんの「どちらまでですかー？」なんてちょっとお前空氣読めよって言いたくなるくらいほんわかした問い合わせに遮られてしまった。

「とりあえず上城東のローソンまで。近くなつたらまた言います」

「かし」とありました

無情にもドアは閉まり、タクシーは走り出してしまった。

不明（後書き）

次あたりから、テレます（多分）

ワインカーをつけてタクシーが車の列の中へ滑り込んでから、ようやく極悪非道は私の腕から手を離した。何気に掴まれていたところがちょっと痛いんですけど。思わず反対側の手でそこをこする。でもなんで課長の自宅になんか行かなきゃいけないんだ。家に連れ込んで説教？ 「冗談じゃない！」

本当に何考えてるんだろう。さっぱりわからない。

なんだかなあ。

思わずため息が出た。

理解不能の極悪非道にいよいよ振り回されて、何やつているんだろ？ 私。

ヤツは私をどうしたいんだろう。

さつき膨らんだ反撃の勢いは膨らんだときと同じくらい急に萎れて、なんだかもうどうでもよくなってしまった。とりあえず乗つてしまつたのだから、もうどうにもならないし。

私も課長も喋らないから、車内には運転手さんのギアを変える音とタイヤがアスファルトの上を転がる音くらいしか響かない。

ちらつと横を窺つと、ドアに頬杖をついてガラスの向こうを眺めている。通り過ぎる車のライトや街灯に照らされた極悪非道の顔は、はい、相変わらずイケメンです。

ある意味こんな残念な美形もないよね。口を開けば罵詈雑言しか出てこないなんて、遠くから見てているだけならいいかも知れないと、近くになんて絶対いて欲しくない。

確かに上城東なら会社から車で20分くらいのはずだ。あの辺りは家賃結構高かったと思うけど、課長様は稼いでらっしゃいますものね

一。

なんか変なの。そういえば、課長といつして一人きりになつたのは、初めてかもしない。

黙つても、別に気詰まりではない。

これはお互い話す意思が無いこと隱してないからなんだらうな。そんな微妙な沈黙を破つたのはやつぱり空氣の読めない運転手さんのほんわかした声だつた。

「お密れん、ローソン見えましたけど~」

「ローソンの脇の道入つてもらひますか、ああ、ヤレでいいです」

もう着いたのか。あつという間だつたような、長かつたような、不思議な時間だつた。

ドアが開いて、不思議な密閉時間が終わる。

早く降りたけど乗降側に乗つている課長が会計してくれないと降りられない。もちろん私は1円も払う気持ちはありません。

上城東からだとどう帰ればいいんだっけ？ 確か最寄駅は私鉄だったようだ。携帯で検索すればいいか。まだそこまで遅い時間じゃないし。

なんて考えていたら課長が会計をやつと済ませてくれた。遅いよ。やつと課長が降りてくれたから、私も降りるべくシートに手をついてお尻をずらして身体ごと乗降側のドアに近づいたら。

「行くぞ」

「やあやー」

不意にシートについていた手をさらわれて引っ張り出される。

ちゅうど体重を手にかけていたから思いつきつ前傾姿勢でつたのめ
るようにな車から降ろされてしまった。

「ちゅうと向するんですか！」

危づくアスファルトの上で転ぶといふだよー

でも、怒りをこめて睨んだつて極悪非道には通じないわけで。

「行べ」

「あの、ちゅうと」

また強引に掴まれたまま歩きだす。……だけれども違つのは掴
まれているところが腕じゃなくて、手のひら、つまり、手を繋いで
いるつて、こと。そして、わざとよりもずいぶんゆっくりと歩いて
くれてこらつてこと。

「課長、私」

家になんて、行けません。そう続けよつと黙つたのと、遮るよつて
課長が喋つた。声はいつも傍若無人さばざへ行つたのかつてぐ
らう穩やかで。

「飯、食わせてやる

何なの、一体どうなつてんの？

いつもとは違う声にて、私は何故か抵抗できずに大人しくついていく
ことしかできなかつた。

課長の家は3階建てのマンションの2階だつた。

帰ろう。この手を振り切つて帰ればいいじゃない。さつきみたいにがっかり腕をつかまれているわけじゃないんだから。

だけど頭ではそう思うのに、どうしてか身体はちっとも動かなくて、階段を上り課長がポケットからキーケースを取り出して鍵を開ける様子までぼんやりと眺めてしまう。

そして促されるままに室内へと入ってしまった。

「座つて待つてる、すぐ来る」

言つなり課長はソファに上着と鞄を投げ捨てるよつに置くと対面式のキッチンへと向かつ。

座れと言われたけれど、座る場所とおぼしきソファには上着と鞄がある。どけていいもんなのかな。ちょっとずらして、端っこに腰かける。黒い皮製っぽい見た目よりもふわふわした座り心地だ。

ソファの前にはこれも黒い木のローテーブルとでっかいテレビ。

ベッドが見当たらぬし、壁紙と同じ色の引き戸があるから、隣が寝室かな。そのままぐるりと室内を見渡してみる。なんかすこしく片付いてる部屋だ。物が極端に少ないし、黒い家具つて結構ほこりが目立つのに全然ない。

テーブルのあるのは昨日の日経新聞とテレビのリモコンだけで、テレビの乗つかつてこる台にちょこんと小さな多肉植物の鉢植えが飾られているくらい。

「おい、座るのやつちじやなくて、じつ

呼ばれてキッチンの方を向いたら椅子が向い合せにふたつついた小さめなダイニングテーブルがあった。

「あ、はい」

慌ててそちらに座ると、キッチンのカウンターからよせと手が伸びてきて、どん、と勢いよくお皿が皿の前に置かれた。

「まあ、それ食つてろ。他のもすぐできるから」

……どうやら本当に、『』飯を『』駆走してくれるみたいだ。

訪問（後書き）

あれ？ なかなか辿りつかない…。

皿の前のお皿に盛られていたのは綺麗に並べられた白身魚の切り身の上に紫色のカイワレ大根と青ネギ、粒「ショウガ」が散らされたものだった。鯛か何かのカルバツチヨかな。

言われた通りにテーブルに置いてあつた箸を持つてはみたものの手をつける気になれず、それを眺めていたらまたキッチンの方から手が伸びてきた。今度置かれたのは小鉢がふたつ。青紫蘇やらみょうがやら、薬味がたっぷり盛られた冷ややっこ。

「何かける?」

「へつ?」

「豆腐。醤油でいいか? 普段何で食べてるんだ?」

「えっと、ぽん酢、です」

「わかった」

すぐに黄色いフタの瓶が差し出されて、慌てて受け取る。右手にお箸、左手にぽん酢を持った私には、全く今の事態が理解できていなかつた。

本当にすぐ料理が出てきた。課長がキッチンへ行ってから10分と経っていないはずなのに2品も。確かにどちらも火を使わず調理方法が比較的簡単なものではあるけれど、同じことをしろって言われても私にはできない。なんでも出来ちゃう立派な課長様は料理までも手際よくやらかしてしまつのか。

茫然としていると、またによきつとカウンターから腕が伸びてくる。今度は湯気のたつた木製のお椀。「じるじると大きく切られた人参やら大根やら牛蒡やらがお味噌汁の中から飛び出している。切ったばかりのみずみずしいネギと一味がきちんと乗せられていた。火の通つたお味噌とネギのいい匂い。

次々と料理が出てきて、あんまり大きくないダイニングテーブルの上はいつの間にかお皿で一杯になっていた。

カルパッチョに冷ややっこ、野菜たっぷりのお味噌汁、トマトのマリネっぽいものがかけられた焼いた豚肉、そして石焼きじゃないビンバ。

統一感は皆無だけど、共通するのはどれもすこく美味しそうっこと。

「なんだ、食つてないのか。いいから食え」

作り終えたの課長が向かい側に座つてからも私はどれにも箸をつけることが出来なかつた。こんなにたくさんの料理が目の前にあるのが久しぶりすぎて、食べる前からお腹がいっぱいだ。

そういえば最近何を食べていたつけ。お昼はコンビニか、会社近くのお惣菜屋さんのお弁当で、朝や夜は時間も食欲も無いからと食べなかつたり適当にあるもので済ませたりしていたような。

いただきます、と柏手を打つように勢いよく手を合わせて、食べ始めた課長のお箸のひとすくいが大きい。一旦小皿にちょっと置くような仕草をするのだけれど、ほとんどのまま口の中に収められていく。

男性の食事つてこんなに豪快だったつけ。思わず眺めてしまつていた私を見て、課長が微笑んだ。

ちよつと！ 失笑でも冷笑でもない笑顔、初めて見たんですけど！

「何呆けてんだ」

笑いながら私の手からぽん酢を取りて、冷ややかにかけてくれた。そのまま自分の分にもかけて、一口頬張る。

「へえ、ぽん酢もつまいま。俺はいつも醤油とラー油なんだけど」

これにラー油合ひじやないか、なんて軽くそのまま席を立つて冷蔵庫から瓶を取り出してくれた。た、食べるラー油常備しているんですか？

「うそ、つまい！ ほら、食べてみろって」

食べるラー油がかけられた冷ややっこが私の前に押し出されて、促されるままに箸をつける。

冷たいお豆腐にたっぷり盛られた薬味とぽん酢の酸っぱさに食べるラー油の香ばしい辛さがすくべマッチしている。

「……おこしー

「だろ」

得意げな笑顔がま、眩しそう。そうだよ、この人イケメンだったよ。

課長の顔から皿を逸らして、出来たての料理に皿をやる。

一口食べてしまつたら、さつきまで影も形もなかつた食欲がわいてきた。

今日はお腹いり飯だつてまともに食べてない。空腹だつたことを思い出したらあとはもう躊躇がなかつた。

カルパッチョは思った通り鯛で、淡白な身にはオリーブオイルとガ

ーリックの風味が利いているし、お味噌汁はほっこり煮えた野菜がたっぷり。かりかりに焼かれた豚肉はベーコンに似た旨みと塩気が甘めのトマトと相性抜群。ビビンパに乗っているナムルはちゃんと種類ごとに違う味付けだ。

美味しいものを食べることが嫌いな人なんていないだろ？。だから私は知らず知らずのうちに食事に集中してしまっていた。でも一通り好きだけ食べてふと気付くと、課長が微笑みながらこちらを見ている。

あれ、私極悪非道と普通にご飯食べてるよ。しかも手料理を！その不可解さに改めて気づいてしまったとたん、箸が止まってしまった。

「ん、もうお腹いっぱいになつたか？」

優しい声色に、びくり、と身体がすくんだ。だつて課長のこんな声、聞いたこと無いんだもの。

怖い。いや声は全然怖くないんだ。何だらう、恐ろしいこというのが近い気がする。

得体が知れないものが目の前に、いる。

「もつと食べろ。お前、最近全然食べてないだらう」

課長の腕が伸びてきて、私の左手を掴んで持ち上げた。腕時計が手首からするするっと肘の方へ落ちていく。こんなに時計のバンドのサイズ、緩くしていたつけ？

「ひんなに痩せちまつて」

ここ最近体重計にのつていなかつたから、痩せたかどうかなんて全然気づいてなかつた。だけれどこうして見れば、明らかだ。一目瞭

然とは、こうこうことを言つんだら？

私が目に見えて瘦せたから、ご飯をご馳走してくれたのだろうか。
普通の上司だつたら、珍しい話じやないかもしだいけれど、私の
向かいにいるのは極悪非道の荒川課長で、しかも自宅で手料理。
どう考えたつて、有り得ないでしょ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7073v/>

さよなら、ベイベー

2011年9月2日00時31分発行